

■受領No.1424

医学史と社会の対話—メディカル・ヒューマニティーズの 社会への研究成果還元およびアウトリーチ活動の展開

代表研究者

鈴木 晃仁

東京大学大学院人文社会系研究科 教授



Dialogue between History of Medicine and Society

Principal Researcher

Akihito Suzuki,

Graduate School of Humanities and Sociology The University of Tokyo, Professor

本研究では、医学史の知見を学術の世界のみならず広く社会に届けることを目的とし、以下の 4 点の活動を展開した。(1)ウェブサイト「医学史と社会の対話」への医学史に関する記事の公開。(2)研究者向けのオンラインセミナーの開催（「PART I 医学史研究者と考える過去と未来」、「PART II 感染症史研究の最前線」）。(3)一般向けのヒストリー・カフェの開催（ヒストリー・カフェ「医学と医療の歴史」）。(4)高等学校向け感染症史教材開発のためのワークショップの開催。

This project aims to host a variety of opportunities for academic researchers and public audiences to learn the medial history, implementing the four activities shown below: (1) to publish articles on the medical history, (2) to host a series of online seminars entitled “Reflection on the past and present with three historians of medicine”(Part I) and “The frontline of the historical research on infectious diseases”, (3) to host a series of public workshops entitled “History Café to learn the medical history”, (4) to host a workshop for creating high-school materials on the history of infectious diseases.

1. 研究内容

本研究の目的は、医学と医療の歴史を社会や文化といった人文・社会科学の観点から読み解く研究を推進すること、およびその成果を社会に還元するアウトリーチ活動を、パブリック・ヒストリーの手法をとりいれて行うことである。

ここ数十年間の欧米諸国において医学史研究は著しく発展し、医学を単なる進歩や発展として描きだすのではなく、その背景に潜む複合的な要因、すなわち疾病の特徴、患者や家族の利害、国や地域によって異なる行政や文化のあり方などから、今日の社会における医学を再検討する視座を提供してきた。同時に、その研究成果は、アウトリー

チ活動を通じて社会に成果還元がなされるようになった。近代医学の発展が社会にもたらす意味について、狭い意味での学術の世界を超えて社会で共有されることが目指されているのである。こうしたアウトリーチ活動から得られるフィードバックは、研究活動にも活かされ、学問と社会が織りなす、新たな循環が造られている。

以上の目的のもとで、本研究では、(1)ウェブサイト「医学史と社会の対話」への医学史に関する記事の公開、(2)研究者向けのオンラインセミナーの開催（「PART I 医学史研究者と考える過去と未来」、「PART II 感染症史研究の最前線」）、(3)一般向けのヒストリー・カフェの開催（ヒストリ

ー・カフェ「医学と医療の歴史」、(4)高等学校向け感染症史教材開発のためのワークショップの開催の4つの活動を実施した。いずれも、採択後に新型コロナウイルス感染症の流行を受けて、感染症の歴史にフォーカスした内容となっている。以下で詳しく紹介する。

(1)ウェブサイト「医学史と社会の対話」への医学史に関する記事の公開

以下、3点の記事を公開した。①は新型コロナウイルス流行初期に公開され、感染症流行とワクチン接種をめぐる歴史を振り返る記事、②は、日本の放射線学の歴史を紐解く記事、③は江戸時代の医師が果たした公的な役割について検討する記事である。いずれも医学史研究をけん引する歴史家の手による。

①季節性インフルエンザワクチン接種—医療政策と接種習慣の日米比較／ジュリア・ヨング(法政大学)

(2020年4月22日公開、

<https://igakushitosyakai.jp/article/post-2394/>)

②永井隆と医学の殉教者／シーリン・ロー(シンガポール国立大学歴史学部・准教授)

(2021年1月19日公開、

<https://igakushitosyakai.jp/article/post-2716/>、

翻訳:鈴木晃仁・高林陽展・廣川和花)

③「療治証文」とは何か? ——江戸時代の医師が果たした「役」／海原 亮(住友史料館)

(2021年2月10日公開、

<https://igakushitosyakai.jp/article/post-2690/>)

(2)研究者向けのオンラインセミナーの開催

このセミナーは、「PART I 医学史研究者と考える過去と未来」と「PART II 感染症史研究の最前線」の二部構成で研究者向けに実施したものである。いずれも、歴史の観点から新型コロナウイルス感染症の流行や感染症という問題そのものを考える機会として企画され、医学史研究にかかわる第一人者たちが講演し、聴衆(研究者)との質疑応答を実施した。

①「PART I 医学史研究者と考える過去と未来」
第1回 2020年6月27日(土)14:00-16:00
参加申込者139名

「COVID-19と感染症の過去・現在・未来」
／鈴木晃仁(慶應義塾大学経済学部・教授)

第2回 2020年7月25日(土)14:00-16:00
参加申込者79名

「日本の感染症史研究の現状と課題」／廣川和花(専修大学文学部・教授)

第3回 2020年8月29日(土)14:00-16:00
参加申込者64名

「感染症から見た精神疾患史の新たな可能性」
／高林陽展(立教大学文学部・准教授)

②「PART II 感染症史研究の最前線」

第1回 2020年10月10日(土)16:00-18:00
参加申込者60名

「感染症対策の転換点:ヒトは一人では生きていけない」
／山本太郎(長崎大学熱帯医学研究所・教授)

第2回 2020年11月14日(土)14:00-16:00
参加申込者59名

「感染症対策におけるコミュニティ・コントロールの位相」
／飯島渉(青山学院大学文学部・教授)

第3回 2020年12月5日(土)14:00-16:00
参加申込者55名

「国際保健協力と国際政治」
／詫摩佳代(東京都立大学法学政治学研究科・教授)

(3)一般向けのヒストリー・カフェの開催(ヒストリー・カフェ「医学と医療の歴史」)

第2回~第4回にかけては、新型コロナウイルス感染症の流行を受けて、連続セッション「医療史家が語る感染症の歴史」を企画・開催した。世界史・日本史におけるパンデミックについてと、現在のパンデミックを医学史家たちはどのように見ているかをテーマとした。

第1回 2020年7月4日(土)14:00-16:00 参加者20名

「民間治療場と精神医療史の邂逅—富山県大
岩山日石寺と徳島県阿波井神社を中心に」/
兵頭晶子(医学史研究者)

第2回 2020年10月17日(土)14:00-16:00
参加者10名

「世界史におけるパンデミック」/
脇村孝平(大阪経済法科大学・教授)

第3回 2020年12月12日(土)14:00-16:00
参加者10名

「日本史におけるパンデミック」/
逢見憲一(国立保健医療科学院生涯健康研究部・主任
研究員)

第4回 2021年2月27日(土)14:00-16:00
参加者20名

「世界の医学史家たちが見た新型コロナウィ
ルス・パンデミック」/
梅原秀元(立教大学文学部史学科・特任准教授)、
高林陽展(立教大学文学部史学科・准教授)

(4)高等学校向け感染症史教材開発のためのワー クショップの開催

「ワークショップ コロナの時代の感染症史教
材を共創する—歴史総合にむけて—」

参加申込者23名

このワークショップは、医学史研究者と地歴科
目担当の高校教員が感染症の歴史にかんする教材
を協働しつくりあげることが目的とするもので、
毎回のワークショップでは医学史研究者の発表
(情報提供)に続いて、参加者の高校教員が教材
開発のために討議をおこなった。

第1回 2021年9月12日(日)13:00~15:30

第2回 2021年10月17日(日)13:00~15:30

第3回 2021年11月21日(日)13:00~15:30

第4回 2021年12月19日(日)13:00~15:30

第5回 2021年3月20日(日)13:00~15:30

このワークショップを受けて、2022年3月、『高
校でまなぶ感染症の歴史 歴史総合の授業でつか
える教材集』が完成し、ウェブサイト「医学史と
社会の対話」にて公開した。また、同ワークショ

ップに参加した高校の先生方が作成した教材案な
らびに参加記をウェブサイト「医学史と社会の対
話」にて公開した(([https://igakushitosyakai.jp/
article/post-2781/](https://igakushitosyakai.jp/article/post-2781/)および[https://igakushitosyakai.jp/
event/post-2794/](https://igakushitosyakai.jp/event/post-2794/)を参照)

(講演者等の肩書は当時)

2. 発表(研究成果の発表)

(1) 発表

・鈴木晃仁「COVID-19 と感染症の過去・現在・
未来」、オンラインセミナー「医学史研究者と考
える過去と未来」、2020年6月27日(土)14:00-16:00
・廣川和花「日本の感染症史研究の現状と課題」、
オンラインセミナー「医学史研究者と考える過去
と未来」、2020年7月25日(土)14:00-16:00
・高林陽展「感染症から見た精神疾患史の新たな
可能性」、オンラインセミナー「医学史研究者と考
える過去と未来」、2020年8月29日(土)14:00
-16:00

(2) 翻訳

・シーリン・ロー「永井隆と医学の殉教者」、訳:
鈴木晃仁・高林陽展・廣川和花、2021年1月19日、
<https://igakushitosyakai.jp/article/post-2716/>

(3) 論文等

鈴木晃仁「COVID-19 のパンデミーと食肉の問題」
筑摩書房編集部編『コロナ後の世界—いま、この
地点から考える』筑摩書房、2021年
廣川和花「「隔離」と「療養」を再考する:
COVID-19 と近代日本の感染症対策」『専修人文
論集』109号、235-256 2021年
廣川和花「ハンセン病「隔離」とは何か」『現代思
想』48(7)163-169 2020年
廣川和花「日本における感染症史研究の現状と展
望」日韓歴史家会議組織委員会・国際歴史学委員
会日本国内委員会『第21回日韓歴史家会議報告書
「伝染病と歴史」』